
妖精

なかゆんきなこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖精

【Nコード】

N4948U

【作者名】

なかゆんきなこ

【あらすじ】

ランカの失踪後、アルトとシェリルはまるで恋人同士のように同じ時を過ごしていた。けれど、アルトは病身の自分を気遣っているだけだとシェリルは思う。

ただの同情だと思いながらもアルトから離れられないシェリルの、切ない物語。

（前書き）

ランカの失踪後、アルトとシェリルはまるで恋人同士のように同じ時を過ごしていた。

けれど、アルトは病身の自分を気遣っているだけだとシェリルは思う。

ただの同情だと思いながらもアルトから離れられないシェリルの、切ない物語。

「シェリル!!」

ダン!! と叩きつけるように扉が開く。

「倒れたって!? 大丈夫なのか!？」

駆け込んできたアルトに、ベッドに横たわったままのシェリルは苦笑した。

「大げさに伝わったのね。ちょっと立ち眩みしただけよ」

もう大丈夫、とシェリルは言う。

しかしその言葉に反して、彼女の顔色は悪く薄っすら汗も滲んでいた。

「どこが大丈夫なんだ。薬は? 医者は呼んだのか？」

「お医者さんにも診てもらったし薬も飲んだわ。大丈夫よ」

そもそも、シェリルの病気は現代の医学で治るものではない。

薬で症状を抑えることはできても、必ず死に至る。

そしてシェリルに残された時間は、わずかだった。

「そう…か」

アルトは、努めて笑顔を作った。

「腹は減ってるか? 食欲があるなら何か作るが…」

「アルトが?」

「なんだよ…。文句あるのか?」

不貞腐れたように呟くアルト。

それが可笑しくて、シェリルはくすくすと笑ってしまう。

「ふふっ。…じゃあ…。そうだ! 苺!…」

唐突に、シェリルは言った。

「苺が食べたいわ。つめたく冷やした苺」

「それだけ…でいいのか…?」

「ええ。苺、買ってきてくれる?」

今、とっても苺が食べたいの、とシェリルが言う。

まるで小さな子供の我儘のようだった。

「…わかったよ」

アルトは苦笑して、シェリルの髪をくしゃりと撫でる。

「じゃあ、ちよつと出てくるから。大人しく待ってるよ」

「はあい」

なんだかんだ言っで、いつもアルトはシェリルの我儘を聞いてくれる。

だからついつい、甘えなくなる。

「苺は甘くて大きいやつじゃないと嫌よ！」

「はいはい」

我儘を言っで無茶を言っで、

困らせて怒らせて、

それでも言うことを聞いてくれる唯一の人だから。

アルトが買い物のために出ていくのを見送ってから、シェリルはごぼつ、げぼつと咳き込んだ。

アルトの前ではなんとか堪えていた。見抜かれてはいると思うけれど。

それでも、アルトの前ではあまり弱っている姿を見せたくない。

彼は優しすぎるから。

弱っているシェリルを放っておけない。

「…っ、はあ…っ」

（…私…卑怯ね…）

自分の病気を盾にアルトを縛り付けている。

今にもランカを探しに宇宙へと飛び立っていきそうなアルトを。

（……ごめん…なさい……）

それでも私には、彼が必要なのだ。

そしてシェリルは、ゆっくりと重い眠りの中へ囚われていった。

「…目、覚めたか？」

重いまぶたを開くと、目の前にはこちらを覗き込んでいるアルトの端正な顔。

本当に綺麗な顔立ちをしている。さすがは『お姫様』と呼ばれていただけはあるわ、と、シェリルはとりとめもないことを思った。

「私…寝てた…？」

「ああ、ぐっすりな。暑冷やしてあるけど、食べるか？」

シェリルはこくん…と頷いた。

喉がぴったり張り付いているように乾いている。

身体も重く、起き上がるのがひどく億劫だった。

「…ねえ、食べさせてくれる…？」

「え！？」

わざと誘うように艶めて囁くと、アルトの顔がさっと赤らむ。

その反応に、シェリルはぷつと吹き出した。

相変わらずだわ、と。

「ふふ。顔、真っ赤よ？ アルト」

「う、うるさい…っ。持ってくるから、ちょっと待ってろ」

「はぁーい」

（…可愛い顔しちゃって…）

キスしたいなあ、とシェリルは思った。

あの綺麗な顔に口付けたら、彼はどんな反応をするだろう。

（…今みたいに真っ赤になって怒るかしら…。それとも…）

もう一度キスを…してくれる…？

（…でも…、ダメ…）

それはダメ…、とシェリルは首を横に振った。

シェリルはアルトのことが好きだ。愛している。

だから傍に居られるのは嬉しいし、アルトが自分に優しいのは同情や憐憫かと思うと胸が苦しくなる。けれど、

(…ダメ…)

アルトに愛されたい、と思う一方で、愛してほしくもないとも思う。自分は、もうすぐ死んでしまうから。

「…シエリル?」

名を呼ばれ、シエリルははっと我に返る。

よく冷やされた苺を盛ったガラスの皿を手にとって、アルトがベツドに腰掛けた。

「…ほら、口、開ける」

丁寧に一つ一つヘタをとった苺をつまんで、ぶっきらぼうに言う。言われるがまま開いた唇に触れる、繊細な指先。

(……今のままで良い……)

冷たい苺をゆっくり噛むと、甘くて酸っぱい果汁が口いっぱいに広がった。

(…ただ…、傍にいてくれるだけでいい…)

答えなんて聞きたくない。

聞いてしまったら、死ぬことが…、

「美味しい…」

生きることが、怖くてたまらなくなるから。

「よかった」

シエリルがゆっくりと噛みしめながら呟くと、アルトはほっとしたように微笑む。

ああ、神様…。叶うなら、

「ねえ、アルト…」

「なんだ…?」

(…あなたが好きよ…)

「……なんでもない」

「なんだよ、それ」

もう少しだけ、この人の傍にいらさせてください。

（後書き）

これはTV版でランカが失踪した後、まるで恋人同士みたいに過ごしているアルトとシェリルに萌えて書きました。そしてシェリルの曲『妖精』にも萌えて、そこからイメージを膨らませました。

私の妄想（というか理想）では、シェリルは「アルトは自分が病気だから気遣って側にいてくれるだけ」と思っているし、アルトは「シェリルが好きで傍にいたいけれど死の病に冒された彼女に想いを伝えられない」という感じで、互いに想いあっているのにすれ違っていてほしいです。

そして最終的にはシェリルと幸せになってほしい。

なので劇場版は恐くて見れません。（一応結末は聞いたのですが

（^—^;)）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4948u/>

妖精

2011年7月1日15時39分発行